

まちづくり ニュース



ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Icho/3732/>

120号

2010年5月21日



ときわ台の景観を守る会

ときわ台まちづくり委員会

代表 鈴木博之 近藤洋子

事務局 島田晴子 tel・fax 3960 - 3869

協力金振込先 郵便局00110-3-739728 ときわ台の景観を守る会

○ 藤和マンション行政訴訟

— 裁判長交代する —

5月21日(金) 11時半 地裁522号法廷で口頭弁論が行われた。3月までの裁判長が人事異動で交代した。前の裁判長はなるべく原告の意見陳述を聞こうとしていた印象がある。今度の裁判長がどういうタイプか、不安と期待がこもごもである。

被告日本建築センターが建築完成にともなう訴えの利益の消滅を口実に、裁判から離れようとしている。これを認めることは「建て得」を容認することになりはしないだろうか。裁判長はこれに関して7月14日までに双方の準備書面を交換し、16日に判決という予告をした。本論についての裁判は、引き続き行われて行くが、原告適格について被告板橋区はまだゴネているようだ。

次回 7月14日(火) 11時～

○ 「構想日本」、「景観ネット」のシンポジウムを開催

「景観市民ネット」が地道な活動を続けているが、4月28日、事業仕分けで知られる加藤氏率いる「構想日本」J1フォーラムが「景観ネット」に発表の機会を設けた。市川の「関さんの森」の迂回策提案や文京区の銅御殿に関わるマンション建設反対運動など、「景観ネット」の支援による事例が報告された。ひとつの前進ではある。「季刊まちづくり」も10ページを割いて「景観ネット」を特集する予定だ。

この日本が破綻寸前で再生できるかは、官僚の長年にわたる国民無視システムの反省とともに、国民がわも今迄のお上依存の価値観を変えられるかどうかにかかっている。しかし、景観ネットのような成熟した市民がいきいきと活動できる社会の実現には、まだまだ道遠しの感がある。

○ 「セピア色の写真展」終わる

昭和20年代の常盤台を中心とした写真展が4月29日(木)～5月4日(火)ギャラリー一服部で開催されました。

昔を懐かしむ住民だけでなく、まちづくり関係の人、区の職員、かつて常盤台に住んでいた人など、様々な人が見に来てくれました。65年前の子供たちの名前もかなり判明しました。残念ながら全員とまでは行きませんでした。

最大の収穫は、誰でも知っている2丁目のNさんご兄妹と連絡が取れ、当時の学生会の様子はかなり判ってきたことです。N家6人兄妹は、83歳の長男の方をはじめ、皆さんご健在でした。これからゆっくり学生会のことを教えていただき、「ニュース」でもお知らせしようと思います。また、戦前の学生会のことも調べつつあります。幹事長をしていたMさんが調査に応じてくださる約束です。

今回の写真展は20年代の写真2枚を中心に、当時の学生会・学生会の人たちに教わった子供たちなど、人物が主なテーマでした。

今回は常盤台の建築・街並みを中心に写真展をしたいと思います。まちづくり関係の世田谷区のKさんから、1974年に常盤台を調査したときの街並みの写真の提供がありましたので、楽しみにしてください。

古い写真がありましたら、処分せずに私たちに提供していただければ有難いと思います。何十年か後には貴重な資料となることでしょう。

今回の企画にご協力くださった方々に感謝いたします。特に貴重な写真を提供して下さったTさん、Fさん、Kさん、Nさん、本当に有難うございました。

私の故郷・常盤台(3)

石井幹子

結婚した二人(注)は、二丁目と一丁目にあつた各々の実家の丁度真ん中あたりに新居をかまえました。私の家から歩いて5分ぐらいのところにある小ぢんまりした可愛い家で、私が遊びに行くには丁度よい距離でした。太平洋戦争がだんだんと激しさを増していった昭和十八年の夏、父は出征しました。一丁目の竹内家の正門の前で大勢で撮った写真が残されています。出征する父を真ん中に私と弟たち、そして母が囲み、そのまわりに親戚になつて間もない甲斐家の人々、そして、当時親しかつた御近所の人達が大勢写っています。

出征した父は、このまま還らぬ人となりました。私たちはのちに疎開をしますが、終戦後すぐに常盤台に戻りました。幸い戦災をまぬがれた常盤台では、一軒の家に何家族も住むようになりました。私の家にも外地から引き上げてきたり戦災にあつて家を焼かれたりした親戚が、何組も集まつて肩を寄せ合うように暮らしていたものです。

戦後、駅前には小さな露店が沢山出るようになりまし。子供心にも広いと思つていた道にも、進駐軍のジープが行き交うようになりまし。

注 石井さんの叔母の竹内里子さんと甲斐誠さん

常盤台の格差

— 写真展から感じたことなど —

写真展では、昔の写真を前にして、色々な興味深い話題が交わされていきました。その中でいつかは取り上げなければならぬものの姿が浮かび上がってきました。常盤台の内外にあつた、もしかすると今も存在する格差のことです。

板橋区という地域は、決して裕福な感じを持たれていない所だと思ひます。その中で、昭和初期に分譲されたこの街が、非常に特殊であり、いわゆるお屋敷町として、やや裕福な階級の人々が住んだことは事実です。

分譲当時、販売された建売住宅の設計図には、たいてい玄關脇に女中部屋が付いていました。ほとんどの家庭にはお手伝いさんが住み込みや通いで来ていたものです。昔の日本の格差社会では、需要も供給もありました。

戦後、民主化されてハウスキーピングも家族だけでできるようになり、今では大学教授も生垣の刈り込みをし、社長夫人といえど道の犬の糞を片付けています。大家族だつたお屋敷町のころは、子供たちも家事を手伝い、女中さんもいて切り盛りできたのですが、今はそうはいきません。そういう核家族には程よい小ささが求められるのです。土地の分割は色々問題がありますが、家族形態の変化が住み方の変化をもたらしたものであり、常盤台が元のお屋敷街へ戻ることは恐らく無いと思ひます。

しかし、人びとが常盤台に来てやすらぎを覚え、ほっとするのは何故でしょう。今回はその矛盾を考えてみたいと思ひます。

常盤台公園のはなづくり

みんなで丹精したバラが、かなりの蕾を付けました。クロケシツブチョッキリに少しやられました。今年四月末まで寒さがひどかつたので、二週間ほど花盛りがずれました。東側の黄色のゴールドシヤワーが真つ先に咲きました。繰り返しよく咲きます。Mさん寄付のモッコウバラは、数年間だんまりを決め込んでいて、みんなをやきもきさせていたのですが、初めて咲いてくれました。香りのする白花の方でした。

皇帝ダリアの記事を読んで、Kさんから連絡があり、苗を七本もいただきました。公園に植えたTさんからの三本のうち一本が枯れてしまったので取替え、まわりの希望者に分けてまだ二本余っています。日当たりの良い場所なら強健に育ちます。欲しい方はご連絡ください。

公園のスタジイの木数本に、セッコクが可愛いピンクの花を付けています。上の方も見上げて下さい。

「野草のスケッチ展」の影響で、芝生の雑草を抜きながら名前を覚えることにしました。スズメノカタビラ・オランダミミナ草・血止め草・紫サギゴケなどなど、「名もない雑草」なんて無いようです。

定例会 六月十九日(土) 七時

「ギャラリー服部」にて